

# がん教育レポート

出張授業シーズンの秋、対がん協会でも新たに2校でがん教育の出張授業を行った。1校は文科省のがん教育モデル校である群馬県立前橋女子高等学校。もう1校は三重県伊賀市の県立上野高等学校で、総合的な学習の時間の一環として学校独自で実施した授業へ協力した。2つの事例を紹介する。

## 三重県立上野高等学校 上野市で初の試み 講義とグループワークを実施

上野高校は忍者の里で有名な伊賀市の上野丸之内に位置する。壮麗な白鳳門を通り抜け、藤堂高虎の築城で有名な伊賀上野城に続く高台の中腹に立地する。城のお堀と石垣、天守閣を背景に、構内には白亜の洋風建築「明治校舎」もあり、部活動の部室として今も活用されている。その上野高校で2009年に新設された理数科の3年生38人を対象に11月12日、日本対がん協会主催のがん教育の出張授業が実施された。

きっかけは同校理数科3年副担任の河井隆志教諭からの電話だった。河井教諭は総合的な学習の時間も担当しており、「命について考え、より良く生きるためにはどうしたら良いかを考える授業」を模索していた際に、朝日新聞に掲載された「ドクタービジット」の記事を思い出し、対がん協会に相談した。

対がん協会は講師の紹介などに協力するとともに、上野高校1校での取り組みに留まらず、今後の広がりに主眼を置いた。そこで、市や県のがん対策部門や教育委員会、近隣の保健師や養護教諭などにも広く参観を呼びかけ、意見交換の場を設けることを提案。また1クラスという規模を生かして、講義の後にグループワークを実施して、



グループワークでディスカッション

生徒たちが主体的に学習できるよう河井教諭と授業内容を練った。

上野高校は普段から総合的な学習の時間でグループワークに力を入れており、講義は対がん協会、グループワークは上野高校側が主導するというコラボレーションが実現した。

当日の講師は順天堂

大学大学院の佐瀬一洋教授。7月の島根県の清陵中学校での講演に続く2回目の出張授業となる。佐瀬教授は循環器の専門医であり、自身も骨軟部肉腫という症例の少ないがんを発症し、手術の前後2年間にわたって抗がん剤による治療を受けた経験を持つ。

今回は講義時間が1時限であり、事前がんにについての予備学習も行っていることから、がん体験者としての経験を中心に話した。

また、日本のがん検診の受診率が先進国の中で最低水準にあることや、正しいがん情報を見極めるためのリテラシーの大切さを強調した。最後に生きていることへの感謝の気持ちを述べ、チーム医療の時代なので色々な職種の必要があることを強調。興味のある人はぜひ医療従事者を目指してくださいと呼びかけた。

2時限目はまず冒頭で佐瀬教授との質疑応答。その後3、4人ずつのグループに分かれ、河井教諭の進行でグループワークに移った。最初は静かな印象だった生徒たちだが、質疑応答になると「なぜがんにかかりやすい人があるのか」「治療はするなと言う人もいる



講義を行う佐瀬一洋教授

がどちらが正しいのか」「闘病中は誰が支えてくれたか」など次々と質問が出て時間が足りないほどだった。

グループワークは7分間と時間を切って、講義で特に印象に残ったところをまとめたうえで、自分たちにできることを話し合い、発表者を決めて班ごとに発表した。

「サバイバーのケアが大事」「受診率が低いのが印象に残った。こういう機会に自分たちも勉強しなければ」「がんに関わる人がすごく多いので驚いた。患者の精神面のケアも大切だと思った」「知識を持った人が、半端な知識の人に教えてあげることが大事」「お父さんに煙草を止めてくれとすぐに言う。長生きして欲しいから」「がん細胞の不死身と言う性質に注目して、良い薬を作るために使えれば良いと思う」など、バラエティに富んだ意見が発表された。

当日は朝日新聞、中日新聞、NHK、地元伊賀上野ケーブルテレビなどが取材に訪れ授業の様子が報じられた。今回の取り組みがきっかけとなって、三重県でもがん教育が広がっていくことを期待したい。